# 教育上の目的に応じ
# 学生が修得すべき
# 知識及び能力に関する情報

2018年版

洗足学園音楽大学　音楽学部

| コース | 作曲コース | 代表 | 清水 昭夫 |
|---|---|---|---|

## ――Ⅰ――
## コースの到達目標

現代において作曲の様態はさまざまですが、本コースにおいての作曲は『楽譜を作成して音楽を伝え、残すこと』を重んじています。このような西洋音楽を中心に発展してきた作曲を志す者は、自分の内なる想いを楽譜にあらわすための様々なテクニックを身に付けなければなりません。

和声法や対位法など、19世紀頃までの作曲技法はもとより、20世紀以降の作曲技法まで、幅広い書法の修得により創造性を高めることが必要です。

実技レッスンや専門選択科目を通じて多くの音楽語法を身に付けるとともに、さまざまな編成による作曲・編曲を通して、あらゆる音楽シーンで活躍できる作編曲家となることが到達目標です。

## ――Ⅱ――
## コースが推薦する基礎科目名

①「浄書と音源の制作」
②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」
③「管弦楽概論」および「管弦楽法」
④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」
⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」
⑥「音楽実技」
⑦「ソルフェージュⅠ～Ⅳ」および「ソルフェージュ研究Ⅰ～Ⅱ」

その他の専門選択科目も履修することが望ましい。

## ――Ⅲ――
## Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「浄書と音源の制作」により、楽譜の書き方を専門的に学び、手書きにおいても、コンピュータ浄書においても正しく記譜できる力を養成します。

②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」において、声楽や合唱の様式を専門的に学ぶことができます。

③「管弦楽概論」および「管弦楽法」により、オーケストラで用いられる楽器についての知識を得ることができ、実際に管弦楽や吹奏楽を書く力を修得します。

④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」、そして⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」において、古典的な技法にとどまらず、近現代の書法を体得することで、自らの音楽が独自性をもつきっかけを得ることができます。

作曲家にとってピアノ演奏など器楽に精通する必要があり、⑥「音楽実技」において楽器の演奏と深く接することが大切です。

以上のすべての学修にあたって、その基礎となる力を育成するための⑦「ソルフェージュ」の学修は不可欠です。

| コース | 音楽・音響デザインコース | 代表 | 渡辺 俊幸 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

本コースは、現代の音楽制作に関する分野を学びます。主に作曲家、録音、音響、映像、さらにはそれらを複合的に活用したメディアコンテンツクリエイター、あるいはミュージック・クリエイターとして社会で活躍出来る人材を育てる事に主眼を置いています。その土台となるはコンピューターリテラシーと和声やコードなどのハーモニーです。これらを修得することにより、音楽作りの基礎を固めることができます。その上に様々なジャンルの編曲やマニピュレーションを学ぶことにより、一連の音楽制作を完結します。また、映像のための音楽の作曲はその応用であり、より高度なカリキュラムを設定しています。一方、録音や音響は学内における多くの”現場”を経験することにより、どのようなシチュエーションでも的確な音響処理ができるようになります。
さらに、インタラクティブな音楽表現を目指したMax/MSPのプログラミング、作品を社会へ発信するツールとして、WEBや映像編集の技術も得ることが可能です。これらの修得はメディアコンテンツクリエイターとしての活躍の可能性を意味します。
このように多岐に渡る学生のニーズや志向する分野に対応したカリキュラムを設定しています。本コースで学ぶ事が出来る貴重な4 年間を有効に生かして、音楽制作に必要な知識を可能な限り幅広く身に付けてほしいと思います。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①「ジャズ・ハーモニー」
「ポピュラーミュージック・ハーモニー」
②「リズムセクション・ライティング」
「アドバンスト・アレンジテクニック」
③「DAW演習Ⅰ・Ⅱ」「Pro Tools入門」
［Max/MSP演習」[WEBデザイン実習」
④「サウンドエンジニアリング基礎理論」
「サウンドエンジニアリング応用理論」
⑤「ソルフェージュⅠ～」
⑥「和声学、対位法」
⑦「管弦楽法」
⑧「指揮法」

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

本コースのカリキュラムのカテゴリーの中でも「セオリー」、「アレンジテクニック」、「デジタル・オーディオ・ワークステーション」、「エンジニアリング」の4部門に含まれる授業は特に重要です。
まず、「セオリー」系に含まれる「ジャズ・ハーモニー」では、商業音楽における共通言語であるコードネームを基本としたハーモニーの基礎を学びます。これを学んだ上で、次の「ポピュラーミュージック・ハーモニー」において、ポップスの分野における様々なハーモニーの進行を身に付けます。ここまでは本人が志向する分野に係わらず、ミュージック・クリエイターとして基礎中の基礎となる部分なので、このコースの全ての学生に履修して欲しいと考えます。この後に続く「アドバンスト・ハーモニー」や「コンテンポラリー・ハーモニー」については、映画音楽家を志望する学生には必須の内容です。ポップス系作曲家を志望する学生であっても洗練された音作りを目指す者にとって、「アドバンスト・ハーモニー」は、高度なテクニックでありながら多くの役立つ知識が得られると思います。
次に「アレンジテクニック」系に含まれる「リズムセクション・ライティング」と「アドバンスト・アレンジテクニック」は、その名称通りの内容の様々なテクニックを得るための講義で、作曲系の学生にとっては、とても魅力的な内容になっています。是非、履修して下さい。
「デジタル・オーディオ・ワークステーション」系に含まれる「DAW演習Ⅰ・Ⅱ」、「Pro Tools入門」においては、コンピューターや音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びますが、これも現代のミュージッククリエイターには欠かせない知識です。さらに可能であれば、表現の拡張のため「Max/MSP演習」「映像実習」も履修すると良いでしょう。
「エンジニア」系に含まれる「サウンドエンジニアリング基礎理論」、「サウンドエンジニアリング応用理論」は、録音、PAエンジニアを志望する学生については、必修と言える講義ですが、作曲系の学生についてもこれからの時代は、このような知識が自分の音作りのために非常に重要になってくると思います。
その他⑤～⑧までに書いた科目は、作曲系の学生には特に履修を勧めたいと思います。その他の共通選択科目も含め音大にいるからこそ得られる知識を貪欲に吸収して4年間を有意義に過ごしてほしいと思います。

| コース | ピアノコース | 代表 | 小嶋　貴文 |
|---|---|---|---|

**―― Ⅰ ――**
**コースの到達目標**

ピアノの演奏を行うために必要不可欠な技能を修得し、専門的な知識を身につける。
また音楽文化に関する広範な教養を得ると同時に、多様な価値観を持つ人々と興味、関心をともに分かち合い、見識を広め協調性を養う。
さらにピアノ演奏を通して自己を表現することに関心を持ち、文化や社会において積極的に活動する能力を高める。

**―― Ⅱ ――**
**コースが推薦する基礎科目名**

①「二重奏」および「室内楽研究」
②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
④「ピアノ指導法Ⅰ・Ⅱ」
⑤「和声学」
⑥「初見視奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
⑦「音楽史」
　(1)「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」 (2)「バロックの音楽史」
　(3)「古典派の音楽史」 (4)「ロマン派、近・現代の音楽史」
⑧その他
　(1)「ピアノ音楽鑑賞研究」 (2)「コミュニケーション＆セルフマネージメント・スタディー」 (3)音楽教室グレード対策講座Ⅰ・Ⅱ

**―― Ⅲ ――**
**Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について**

① 二重奏と室内楽
　アンサンブルの学習は独習の機会が多いピアノ学習者にとって重要です。他者とともに音楽的なそれぞれの役割を理解してテンポやバランスなど、協調して演奏を行うことはアンサンブルそれ自体の学習にとって重要であるばかりでなく、独奏の際にも役立たせることができます。特にピアノ以外の弦楽器や管楽器奏者と学習を行うことは、それぞれの楽器の特性や音色の違いなどの理解を深め、ピアノ奏法においても音楽性や多様な音色での演奏能力を身につけるために必要不可欠です。二重奏ではまずピアノ連弾作品から学習を行いますが、2台ピアノ等も含めピアノ同士での学習も有益で、これらアンサンブルの学習を通じて他者との協調性を養っていくことになります。

②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」 ③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
　歌のように、また踊りのように演奏したい、これはピアニストにとっての重要な目標として挙げられる項目です。フレージングの把握、レガートなどのアーティキュレーションの表現、テキストから読み取れる文学的かつ具体的な思考の具現などを通して想像力を豊かにすることはピアノ学習者の音楽性を養うための良い機会になります。さらに自分自身の音や歌い方を客観的に聞く習慣を育む事が出来る授業です。声楽や器楽奏者等他者の自己表現を通じての協調性や自らの自己表現等を学びます。

④「ピアノ指導法Ⅰ・Ⅱ」
　ピアノ指導の方法を考察して実践することを通して、教育理念や現在に至るまでの各ピアノ指導法の研究を行うのがこの授業の目標です。幼児の身体、運動機能、心理発達などの基礎知識、教材研究、レッスン体験など、卒業後に指導する立場となり実際に生徒さんを指導する際に役立つための授業内容となっています。

⑤「和声学」
　和声学の基礎である三和音をはじめとした長調・短調の和声学の理論と実施および分析を行うこの授業では学習の段階や能力に応じてきめ細かいクラス別の指導が行なわれます。ピアノの学習者にとって和声学で扱われる四声体を中心とした学習はピアノの作品中にみられる調性和声の和音の響きや非和声音を含んだ旋律線などの声部の動きを日常的に演奏することに直結する内容が多く含まれます。この授業での学習とともに実施課題や分析課題などをピアノで演奏して復習を注意深く行うことは特に有益です。次の「初見視奏」の学習とともにピアノ演奏に必要な専門的な技能を身につけることにつながります。

⑥「初見視奏」
　ソルフェージュで学習する旋律等の読譜を発展させて、ピアノ作品の楽譜の読譜を通して、書かれている音楽の要素（テンポ、曲想、メロディー、和声、伴奏型など）をいち早く捉えてそれを実際にピアノで演奏する授業です。初見視奏そのものの上達はもちろんのこと、日頃のピアノ学習の際にどのように読譜を行い作品に対して効果的なアプローチをしていくかという点を学べるところが科目履修が有益である理由です。

⑦「音楽史」
　音楽文化の歴史的な背景の学習は音楽研究に必要不可欠であり、また演奏の際にもそういった時代や地理的な特徴による様式をどのように活かすかが直接的・間接的に重要となります。ピアノ学習者が頻繁に取り扱うことの多いバロック後期から20世紀前半までの時代の音楽史の学習はもちろん念入りに行わなければなりませんが、それ以外の時代や地域の音楽の歴史についてもより多く捉えていくことがコースの到達目標で示された、音楽文化の広範な教養を身につけることにつながります。

⑧ その他
　詳細は該当科目のシラバスを参考にしてください。

| コース | 管楽器コース | 代表 | 佛坂 咲千生 |
|---|---|---|---|

**―― Ⅰ ――**
**コースの到達目標**

管楽器コースでは、「優れた演奏・指導能力」と「協調性」を大切な目標に掲げます。
そもそも管楽器はピアノと違い単音でしか演奏出来ない楽器です、プロのオーケストラやウインドアンサンブルを見ても分かるように管楽器の演奏家としての殆どの職業は合奏態の中に有ります。この現場で求められる事柄は「卓越した技術・音楽性」そして「協調性」なのです。また、吹奏楽指導者マスタークラスでは、教育者としての道を選ぶ者にとっても「優れた指導能力」と同時に学校という集団生活の中で子供達とのコミュニケーションを図りクラス全体の空気を読み取りそれを良い方向に導く「協調性」を示す事が出来る能力が求められるのです。つまり、大学卒業後、皆さんが活躍されるであろう、あらゆる現場では「有能な技術」に加え「協調性」を兼ね備えた者が求められているのです。
これから皆さんは個々の演奏能力や音楽性、また指導能力を養うべく厳しい鍛錬の場に身を置くことになりますが、学生生活の中に於いても職業の現場をシュミレートしながらの日々を送って頂く事により有能な新人として社会に羽ばたいて行ってくれる事を望んでいます。

**―― Ⅱ ――**
**コースが推薦する基礎科目名**

①「ソルフェージュ」
②「和声学」
③「音楽分析基礎講座」
④「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」
「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
⑤「副科実技」（ピアノ）

**―― Ⅲ ――**
**Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について**

①「ソルフェージュ」
音符への対応、基本的なリズム感、音程、フレーズ感等の能力を養う。
②「和声学」
楽譜を読む力、音符へのこだわり、調性、フレージング、音程感等の理解度を深める。
③「音楽分析基礎講座」
クラシック音楽の表現上のルールを知る。表現の理論的裏付けをする。
④「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」
「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
取り組む音楽の歴史的位置、その音楽が成り立って来た過去・未来を感じ、表現に役立てる。
鑑賞の立場に立った時、人類の社会的変遷と文化・芸術のかかわりが理解でき、広い音楽観を持つことにつながる。
⑤「副科実技」（ピアノ）
和声感を身につける。
スコアリーディングに不可欠な能力を養う。
ピアノ曲で基本的な音楽形式を学び、自分の専門楽器に生かす。

| コース | 弦楽器コース | 代表 | 荒 庸子 |
|---|---|---|---|

## ――Ⅰ――
## コースの到達目標

弦楽器コースはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ハープ、の専門コースがあり、各々専門の先生に実技指導を受けます。
その他に下記の合奏授業にも重点がおかれています。

A 弦楽合奏
本学にはストリングオーケストラの授業があり、そこでは弦楽器に重要な合奏能力を養うための基礎的な養成に力を入れています。ストリングオーケストラはオーケストラ・室内楽を学ぶ上でとても重要な授業です。

B オーケストラ
交響曲や管弦楽曲の幅広い音楽を学び、オーケストラの仕組みを演奏を通して学んでいく事ができます。

C 室内楽
少人数の合奏を学ぶ事により、演奏能力を共に高め合いながら、より緻密なアンサンブルを学ぶ事ができます。

プロフェッショナルな個人レッスンをはじめとして、これらの合奏教育を通して、すぐれた音楽家に育てあげる事を目標としています。

## ――Ⅱ――
## コースが推薦する基礎科目名

①「ソルフェージュⅠ～」
②「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
③「和声学Ⅰ～」
④「音楽分析基礎講座」

## ――Ⅲ――
## Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「ソルフェージュⅠ～」
楽譜を読む上での基本であるリズム、音程、フレーズなどの訓練のために不可欠です。

②「バロック・古典派・ロマン派・近現代の音楽史」
バッハに代表されるバロック時代から、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派、そしてロマン派等、その時代の歴史的な背景またはその時代における音楽の役割を学ぶ事は器楽奏者にとって欠く事の出来ない重要な学問です。

③「和声学Ⅰ～」
音楽の根源的な理解の上で、大変重要な勉強のひとつに和声学があげられます。ことに弦楽器は、ほとんどが単旋律の楽器といってもよいものですから、調性の勉強のためにも和声学的考察は重要です。和声学の知識なしに楽曲の分析、解釈は不可能と言ってよいでしょう。

④「音楽分析基礎講座」
楽譜に提示されるあらゆる記号、約束事、また、和声学的解釈、音階等、読譜のための基本を学ぶ上で大変重要、かつ実際的な学問です。

| コース | 打楽器コース | 代表 | 神谷 百子 |
|---|---|---|---|

**―― Ⅰ ――**
**コースの到達目標**

本コースでは各種打楽器の奏法を学び、豊かな表現を追求し、様々な演奏形態に即座に対応できる応用力を身につけ、そのプロセスを通じてプロの音楽家や教育者、その他音楽を通して社会で活躍できる人材の育成を行うことを到達目標としています。
その目標のためには
・「個人での実技練習で、基礎から始まる実力の向上を目指すこと」
・「楽曲のアナリーゼと楽譜の読譜能力を身につけること」
・「各種打楽器の背景や歴史を学ぶこと」
・「楽器の構造を学習して基本的なメンテナンス方法の知識を知ること」
も大切な要素となります。
また、オーケストラ、吹奏楽、各種アンサンブルや他コースとのコラボレーションの積極的な実践を推奨し、その経験から人とのつながりや音楽表現の幅と視野を広げて行き、大学卒業後、社会の場に出た時に様々な対応が出来るようにします。

※吹奏楽指導者マスタークラスでは、吹奏楽指導者に必要不可欠なスキルを身につけることを目標とします。

**―― Ⅱ ――**
**コースが推薦する基礎科目名**

① ソルフェージュⅠ～
② 和声学Ⅰ～
③ 音楽分析基礎講座
④ 古代、中世、ルネッサンスの音楽史
　バロックの音楽史
　古典派の音楽史
　ロマン派、近・現代の音楽史
⑤ 副科実技（ピアノ）

**―― Ⅲ ――**
**Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について**

①、②、③　：オーケストラ等の中に組み込まれた打楽器パートを演奏する上ではもちろんのこと、打楽器だけの作品（ソロ、アンサンブル問わず）でも、楽譜を読むにあたり、単に音符の羅列をたどるだけではなく調性、音程、和音構成、フレーズなどを理解し、また、決められている基本的な約束事を知ることは大変重要です。
④　：各時代の音楽史を学び、時代背景とそこでの音楽との関連、発展の歩みを知ることが作品へのより深い理解に繋がり、また、これからの時代の音楽のあり方、そこでの打楽器の位置づけなどを考察して行く手がかりとなります。
⑤　：　スコアリーディングを学ぶ。また、打楽器以外の楽器演奏の基礎を習得することは特に将来的に何らかの形で教育・指導に携わる人達には非常に有益です。

| コース | 電子オルガンコース | 代表 | 赤塚 博美 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

現代の音楽界に於いて、存在を浸透しつつある電子オルガンは、演奏・創作・教育とあらゆる面で魅力を持つ楽器である。楽器の持つ性格からも、クラシック・ポピュラーを初め、あらゆるジャンルの知識、理解が不可欠である。当コースでは、演奏家として、教育者として、いろいろな分野で活躍できるよう、経験豊富な活躍中の講師陣を揃えて、演奏・創作の両面からアプローチしている。それぞれの専門家より学ぶことで、技術のみならず、自分の楽器、そして音楽を、言葉や音楽で表現できるようになることを目指すものである。楽器の持つ多面性を利点として、幅広い音楽活動ができる人材を作ることを目標とする。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」
②「電子オルガン演奏法」
③「オーケストラ演習」
④「ポピュラー奏法研究」
⑤「創作演習」
⑥「編曲演習」
以上に加え、演奏グレードマスター講座等、専門選択科目については、履修することが望ましい。

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」では、楽器のさまざまな機能を音楽的に有効活用する方法を学び、さらにはコンピュータとの接続から音作りまでを幅広く研究していく。本番を行う場合の音響設定なども学び、それを実際の現場で試行し経験を積むことにより、演奏家、指導者などに生かすことができるようになる。

②「電子オルガン演奏法」では、テクニックを学ぶのはもちろんのこと、音楽の解釈や演奏表現にまで及ぶ。自身の演奏力アップのみならず、指導法も学ぶため、演奏家としての技術、指導者としてのノウハウも持つことができ、論じることができるようになる。

③「オーケストラ演習」は、指揮者のもとスコアリーディングによってクラシックの管弦楽曲やコンチェルトを合奏すること学び、演奏と共にクラシックの様式なども学び、演奏家としての経験並びに指導者としての指導法などを実践を通して学んでいく。

④ポピュラー奏法研究は、ギター、ドラムス、ベースとのセッションを通じてポピュラー音楽のさまざまなスタイルやリズム、更にアドリブなども学ぶ。セッションを通して、人とのコミュニケーションなども学び、音楽と共に成長していく。

⑤「創作演習」では、理論と実習を主眼とする実践的な講座になっている。電子オルガンによるオリジナル作品を完成させることから、個々のレパートリーを増やすしていく。

⑥編曲演習では、電子オルガンの多様性を経験すべく、クラシック、ポピュラーそれぞれの教員が、“私の編曲法”という観点から、個性豊かな講義を行う。幅広くスタイルを学ぶことは、個々の音楽の広がりを実現するだけでなく、指導者になる

| コース | ジャズコース | 代表 | 小嶋 貴文 |
|---|---|---|---|

## I コースの到達目標

コースの目指すところは、ジャズのコンセプトを持った創造的な音楽家の育成です。まずそのための、コースの理念について説明します。

1. ジャズとは何か

ジャズコースでは当然ジャズを学ぶことになるのですが、しかし、ジャズとはいったい何でしょう? ――自由にアドリブすること？ それとも思い切りスイングすること？ それとも……。ジャズとはいったい何なのか、それが分からなければ、何を学んだらいいのか、雲をつかむような話になってしまいます。ジャズとはどんな音楽なのかをまずは考えてみましょう。

1-1 ジャズという音楽ジャンル

例えば皆さんがCDショップやネットショップでジャズというカテゴリーを探すと、そこには実に多様な音楽が存在しています。たとえば、スイングジャズ、モダンジャズ、ラテンジャズ、クラシック音楽に近いピアノソロ、フリージャズ……などなど。場合によってはボサノバのCDもジャズのところに置かれていますし（ボサノバはアントニオ・カルロス・ジョビンによってジャズとブラジル音楽が融合してできた音楽）、ロックの影響を多分に持つと思われる
フュージョンやファンクといった音楽もジャズ分野にカテゴライズされていたりします。よく耳にするポップス曲の間奏でサックスがカッコいいアドリブをしていて、とってもジャズっぽい……これはジャズでしょうか？そうではないのでしょうか……。このように、ジャズをジャンルとして分けることは必ずしも簡単なことではありません。

1-2 ジャズという音楽の性質

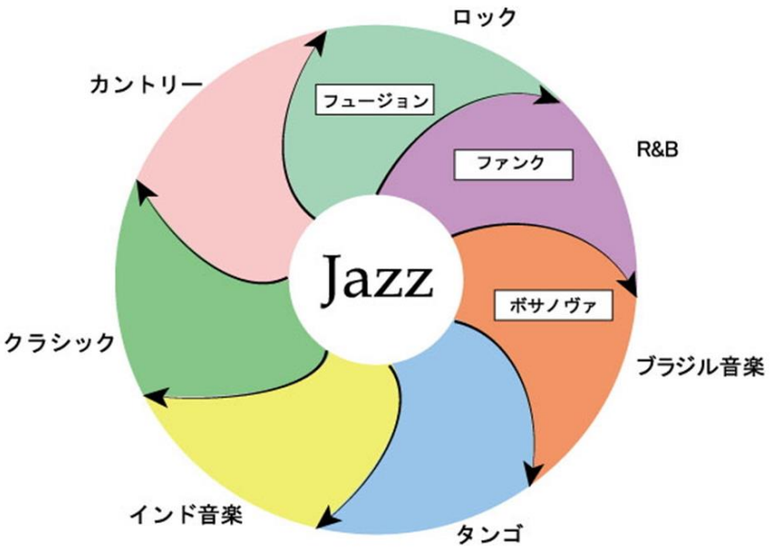
ではジャズという音楽は、他の音楽と比べて何が違うのでしょうか。その特徴はどんなものだと思いますか？　例えば「アドリブを中心に音楽してる」とか、「スイング・ビートがいちばん基本（？）にある」というように……。そのようにジャズの性質を集めてくると、いくつもの特徴を挙げることができます――
・アドリブする音楽
・スイングする音楽
・アメリカ南部発祥の音楽
・テンション、モードといったハーモニーの複雑な音楽（習うのはこれからです）
・柔軟かつ創造的な音楽
・ビッグバンド、ピアノトリオといった形式的な特徴のある音楽
・夜の（オトナの）音楽？？
……

ただこれらの特徴はどれも確かに""ジャズ""を説明しているように見えますが、どれかひとつ、絶対的なものというのは必ずしも存在しないようです。いくつかをまとめることでジャズのおよその特徴を説明することはできそうですが。人の主観によっても感じ方は違いますし、ジャズの曲といっても色々あるので、その曲や演奏の表現のしかたによっても取り上げられる特徴は異なりそうです。

上記のように、ジャズを音楽の枠組みとして定義づけることは決して簡単なことではないことがわかります。そこでジャズコースでは、音楽表現の結果としての枠組みを考えるのではなく、音楽を創作したり演奏する側のアプローチのしかた、すなわち""音楽をつくる姿勢""としてのジャズを考えることにします。
その姿勢とはどんなものかと言えば――

・より自由度の高い即興演奏をする姿勢
・より高度で創造的な音楽をつくろうとする姿勢
・刻々変化する音楽の流れに対してと柔軟に対応しようとする姿勢

です。このように音楽に相（あい）対する姿勢を我々はジャズのコンセプト（思想）と呼んでいます。**ジャズのコンセプトを持って音楽すること**、これがジャズコースにおける最大の目標になります。
ですから、ポップスの間奏に一瞬出てくるサックスのアドリブ・ソロもジャズのコンセプトにもとづいた演奏表現ですし、スイングだからジャズ、歪んだ音でファンクをやったらジャズじゃない、といった分け隔てはありません。ジャンルとしてのジャズのコンセプトによって生み出される音楽は実に多彩です。その多彩な音楽に枠組みを無理に与える必要はありません。



3. 到達目標

ジャズのコンセプトを持って音楽できるようになること、それが目標ですから上記の"姿勢"を引用して、以下のようになります。

・より自由度の高い即興演奏ができるようになること

・より高度で創造的な音楽をつくることができるようになること

・刻々変化する音楽の流れに対して柔軟に対応することができるようになること

最後の項目はことにアンサンブルにおいて重要です。ジャズのコンセプトを持った音楽家同士が演奏をすると、そこに相互的な音楽のやりとり（インタープレイ）が生まれます。そのように刻々変わっていく音楽を察知して自分なりの表現を加えていく、そのような柔軟性が求められることになります。

4. 目標となる音楽家像

４年間に蓄えた総合能力を生かして、卒業から将来にわたって目標にして欲しい音楽家像を示します。

4-1 演奏家

どのような音楽環境や音楽の流れの中にあってもジャズのコンセプトにもとづいた最高の自己表現ができるような演奏家。

4-2 作編曲・プロデュースできる音楽家

自分の理想とする音楽を実現するために、演奏だけでなく作編曲から自己プロデュース（制作）も行える音楽家。

4-3 教育者

中高や音楽教室のような教育現場で、ジャズのコンセプトに基づいた音楽の演奏（歌唱）およびアンサンブル、創作を指導することができるような人材。

**——Ⅱ——**
**コースが推薦する**
**基礎科目名**

①ジャズハーモニー
②ジャズソルフェージュ
③アンサンブル／ラボ
④アレンジング
⑤リズミックトレーニング

## ――Ⅲ――
## Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

ジャズコースの到達目標を今一度確認しておきましょう――

・より自由度の高い即興演奏ができるようになること

・より高度で創造的な音楽をつくることができるようになること

・刻々変化する音楽の流れに対して柔軟に対応することができるようになること

これを踏まえた上で、重要な基礎科目について、上記到達目標との関連性および役割を説明します。

①ジャズハーモニー
世界には即興演奏をする音楽がたくさんあります。しかしそのなかでジャズはもっとも複雑なハーモニー構造を持っており、そうしたなかで即興演奏をするには、そのしくみの把握が必須となります。ハーモニーの授業ではメロディとの関係も学びますし、作編曲の能力向上や、より創造的な音楽づくりにも欠かせないものとなります。

②ジャズソルフェージュ
音楽が共演者と進行する中で、どのような音が出されているのかを把握できなければ柔軟に対応することはできません。コード進行を見ただけでその響きが音としてイメージできたり、そのハーモニーに対してどんな音を出せばどんな響きがするのか分かる。そういったことは即興演奏をする上でも非常に必要なことになります。もし、自分の出す音がどんな音なのかが分からないで音を出したとすれば、それは単なるデタラメです。頭の中に鳴る音が聴音できれば、作編曲の能力も向上することになります。

③アレンジング
ジャズには独自の音の配置（ヴォイシング）に関する文化があり、これを基本的な楽器法・記譜法から体系立って学びます。またジャズが広範なジャンルに関わる性質を　持っていることから、さまざまなスタイルに通じるスキルも身につける必要があります。そのようないわゆる″書くため″学習は、一見アレンジされていないと感じるスモール・アンサンブルには関係ないように感じられるかもしれません。しかしそういった演奏の中にも、各演奏者がアレンジ的視点を持って次への展開を考えなければいけない　場面が多々あるため、たとえアレンジャーになろうとしない演奏者にも必要な勉強になるでしょう。の

④アンサンブル／ラボ
ジャズにおいては最も実際的な表現方法と言えます。他の演奏者と共演することで、流れる音楽の中でその能力を問われることになり、自分に必要なものは何かということを切実に感じることになるでしょう。自分独りでの演奏というのはあくまで自分本位なものなのです。また、アンサンブルは様々な科目で修得したことがらを総合的に発揮する場でもあります。ラボは各楽器のアンサンブルにおける役割を修得する楽器ごとの研究（ラボラトリー）クラスになります。

⑤リズミックトレーニング
即興演奏はデタラメではありません。それはリズムに対しても言えることで、不本意に崩れたリズムは決して望ましいものではありませんし、ドラマー以外の演奏者にもリズムのアイデアや他の共演者の演奏するリスムに対する理解、またグルーブに対する考え方がとても大きな糧となることでしょう。

| コース | 現代邦楽コース | 代表 | 松尾 祐孝 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

1. 演奏能力についての目標
　基本奏法の習得、演奏技術の向上を目指した実習や合奏演習を通じて、音色にこだわった厳密な音程（音律）とリズム（間）に対する感覚を養い、演奏家としての必要不可欠な音楽的基礎能力を確実なものとする。合奏については邦楽アンサンブルのみならず、洋楽等、他ジャンルとのコラボレーション対応力を身につける。正確な読譜、楽曲分析、演奏解釈に基づき、古典から現代作品まで様々な様式の作品に取組む。さらに既存の作品のみならず創作や即興演奏も試み、演奏家としての実力を養う。
2. 教育的能力についての目標
　学校教育における邦楽器の活かし方や教育法を研究する。さらに未経験者、高齢者、障害者等を対象とした（想定した）邦楽器によるワークショップの実習を通じて、ワークショップリーダーやサポーターの能力を養う。
3. 知識面についての目標
　自身が専攻する音楽ジャンルだけではなく、様々な分野の日本伝統音楽について理解し、正しい知識を持つ。また、日本伝統音楽との関連性を考慮しつつ、周辺アジアをはじめとして世界の民族音楽についての知見を広める。音楽を通じて日本文化に対する深い造詣と国際的な視野を持つことを目指す。
4. 演奏家としての目標
　確かな演奏技術を基に伝統を踏まえた上で、豊かな音楽性と真の個性を確立し、国内外において活躍できる演奏家を目指す。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①「ソルフェージ」
②「邦楽サウンド論」
③「邦楽ワークショップ2～4」
④「日本伝統芸能研究１～4」
⑤「日本音楽史」
⑥「東洋音楽史」
⑦「日本の伝統芸能と音楽」
⑧「古典邦楽作品研究」
⑨「現代邦楽作品研究」

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

　日本の伝統音楽は元来口伝を基本とし、楽譜は存在してもあくまでも目安に過ぎなかった。しかし、現代における情報化社会では多様性と即応性が求められ、現代作品においては五線譜で書かれているのが通常である。そのため、これからの邦楽奏者は各楽器の奏法譜とともに五線譜による正確な演奏能力が要求され、「ソルフェージュ」はその基礎となる。また、本コースにおける共通認識を構築する基幹授業として「邦楽サウンド論」が存在する。
　近年、小中学校の音楽授業における和楽器導入を切っ掛けに新しい邦楽の教授法、教育法が望まれている。「邦楽ワークショップ2～4」は新時代の邦楽における音楽教育法のあり方を研究する授業になる。
　自国の文化を理解することは国際的活動の上で必要条件であり、国内外で活躍する邦楽演奏家を目指す者にとっては尚更である。上記の講座はその目的に添う。

| コース | ロック＆ポップスコース | 代表 | 前野 知常 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

現代の商業音楽では、1アーティストを世に送り出すために、多くのプロフェッショナルが関わります。ソロ、バンドを問わず、レコーディング、コンサート、宣伝、販売、マネージメント等、アーティスト一人だけの力ではカバーしきれない部分をチームワークで補いながら、「最高」を目指すのです。
　この時大切なのは、チーム全員が同じ「最高」をイメージすること。それぞれが勝手な方向性・レベルで考えていては、よい結果は得られません。イメージを共有し、方向を定めることこそがプロデュースにおいて最も重要な要素なのです。
　本コースでは、ミュージシャンに必要不可欠な「個性」を1対1のレッスンで育てながら、バンドアンサンブルでチームプレイを経験し、さらにレコーディングやライブを通じて「最高」の結果を得るためのプロデュース・ワークを学びます。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①「バンド・ワークショップ1・2」（1・2年次）
　「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」（3・4年次）
②「レコーディング・セッション1・2」（1・2年次）
　「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」（3・4年次）
③「R＆P・ベーシックス」
④「R＆P・セオリー」
⑤「R＆P・ヒストリー」
⑥「ソルフェージュⅠ～」

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「バンド・ワークショップ1・2」
　「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」
　バンド活動のシミュレーションを行います。半期3回のレコーディング・セッション、半期末のライヴを目標に制作・練習を行う、このコースの中心授業です。半期毎にバンドは再編成。ソロ・アーティストを目指すミュージシャンも、様々な個性、価値観に出会うことができます。
②「レコーディング・セッション1・2」
　「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」
　1年次からプロレベルのレコーディング・スタジオ・ワークを経験します。「いい音」を聞くことで「いい耳」を育てます。
③「R＆P・ベーシックス」
　ロック・ポップスを目指すミュージシャンに最低限必要な知識を習得します。音楽家の共通言語である譜面の読み方書き方、機材・コンピューターの知識、音楽業界の構造、レコーディング・マナー、ステージパフォーマンス等、多岐に亘ります。
④「R＆P・セオリー」
　ロック・ポップスの世界ではコードが作編曲やアンサンブルのキーワードとなります。コードがどのようなセオリーでできているのか、という初歩的な知識から始まり、コードをどのように繋げたらよい曲、アレンジができるのかを、実在のヒット曲を例にとり解説します。
⑤「R＆P・ヒストリー」
　ロックという言葉が音楽のジャンルを表す言葉として使われ始めてから約半世紀が経ちました。常に「新しいこと」「人とは違う何か」を追求し、チャレンジしてきた先人達のアイデアの中には、今も「使える」もの、あなたの感性を刺激するものがきっとあります。勉強というより、宝探し的な講座です。
⑥「ソルフェージュⅠ～」
　初めて聞いたメロディーをすぐに口ずさめますか？
　流れてくるリズムに合わせて自然に体は動きますか？
　この授業は、ミュージシャンの命とも言える「耳」を鍛えます。

| コース | ミュージカルコース | 代表 | 篠原 真 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

ミュージカルは、演劇と音楽が融合した総合舞台芸術の一つである。優れた舞台人になるためには、歌、ダンス、演技の基礎理論や専門知識を深く学び、それぞれの技術を向上させることが求められる。
本コースでは、一人ひとりの可能性を最大限発揮するために、理論・実践の両面から指導を受け、多彩なコースを持つ洗足学園音楽大学ならではのオリジナル企画・公演を経験することができる。また、プロの舞台稽古の見学、レコーディング、TV・コンサート出演など、本物に触れる機会を通し、個人のレベルアップを目指している。英会話・ソルフェージュ・音楽理論等、ニューヨークやロンドンの教育システムを参考としたカリキュラムを通して、将来幅広く世界で通用するプロフェッショナルなミュージカル俳優となることを目標とする。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①「ヴォイストレーニング」
②「英会話講座」
③「ミュージカル概論」
④「舞台芸術概論」
⑤「演技論」
⑥「戯曲論」
⑦「基礎音楽理論」
⑧「ミュージカルソルフェージュ」
⑨「舞台音楽論」
⑩「演出論」
⑪「ワークショップリーダー養成講座」
⑫「音楽分析基礎講座」

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「ヴォイストレーニング」専門のヴォイストレーナー、もしくはミュージカルに精通した声楽コースの講師による歌のレッスン。（個人レッスン40分）
②「英会話講座」将来、ミュージカルの本拠地（ニューヨーク・ロンドン）で活躍する事を想定した、実践的な英会話（台詞やステージマネージメント等で役立つ）の習得。
③「ミュージカル概論」CD・DVD・ビデオを使用し、オペラ・オペレッタからミュージカルに至る歴史的背景や日本の現状を解説。アメリカ、イギリス、日本の代表的なミュージカル作品を取り上げ、総合芸術の一つとしてのミュージカルの位置づけを考える。
④「舞台芸術概論」日本における歌舞伎や能などの古典芸能、西洋のギリシャ悲劇からバレエ、オペラなどの舞台芸術全般に関する講義。
⑤「演技論」演技というものがどのように捉えられてきたのか考察するとともに実際に演技実習を行う。
⑥「戯曲論」テキストを読む力を徹底して鍛える。
⑦「基礎音楽理論」音楽理論の初歩を中心に基礎力を徹底的に身につける。また、ポピュラーやジャズ、民族音楽などを含む多くのジャンルの音楽に触れながら、楽曲の様式を学ぶ。
⑧「ミュージカルソルフェージュ」楽譜を読むこと、書くこと、歌うこと、音楽の成り立ちを考えること等作品と演奏との関わりを追求し、音楽大学生として必要なソルフェージュ能力の習得。
⑨「舞台音楽論」ミュージカル音楽を中心に、その作曲技法やストーリーとの関連性について分析する。
⑩「演出論」舞台芸術における演出の仕事とは何かを、演技、美術、照明、音響、衣装、メイクなど各方面から明らかにするとともに、世界の名演出家の思考・業績を研究する。芸術面だけでなく、現場における演出家の実務面の役割についても講義する。
⑪「ワークショップリーダー養成講座」近年さまざまなジャンルでワークショップのニーズが高まっており、それに対応できるワークショップリーダーに必要なスキルやプログラムの作成・進行について学ぶ。
⑫「音楽分析基礎講座」楽曲を演奏するために必要な、作品に対する理解力・分析力を学ぶ。

| コース | 声楽コース | 代表 | 塩田 美奈子 |
|---|---|---|---|

## ――Ⅰ――コースの到達目標

声楽は身体を楽器として共鳴させる事により、感情や自然の美しさ等を表現することが出来るすべての音楽の源である。本コースでは人の心に訴え聴く人に感動を与える舞台表現者を目指す為に、詩に関する知識・能力を養い、音楽表現・身体表現に必要な専門的講座を数多く用意し、演奏家、指導者、他それぞれの進路に合わせ科目を選択し研究する。発声のテクニックを向上させ、知識や教養を身に付け、感性を磨き、さまざまな経験を通して豊かな表現力を身に付ける事で、スケールの大きな声楽家として研鑽し成長することを目指す。

## ――Ⅱ――コースが推薦する基礎科目名

①「声楽基礎演習Ⅰ－1」②「声楽基礎演習Ⅰ－2」③「声楽基礎演習Ⅱ－1」④「声楽基礎演習Ⅱ－2」
⑤「オペラ実習」
⑥「アンサンブル実習」
⑦「専門合唱」
⑧「イタリア歌曲研究」⑨「ドイツ歌曲研究」⑩「フランス歌曲研究」⑪「日本歌曲研究」
⑫「室内オペラスタディ」
⑬「ピアノ実技」
⑭「シアターダンス」
⑮「音声学」
⑯「合唱指導法」
⑰「音楽分析基礎講座」

## ――Ⅲ――Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「声楽基礎演習Ⅰ－1」②「声楽基礎演習Ⅰ－2」③「声楽基礎演習Ⅱ－1」④「声楽基礎演習Ⅱ－2」　声楽を学ぶ為の理論と実践の基礎を学ぶ。各国語のネイティヴの講師によるディクションに基づく伊・独・仏歌曲、オペラやアンサンブルの演習、舞台表現の基礎を作るボディ・マッピング、アクティングなど、それぞれの分野専門の講師陣による指導により、将来どのような専門家として活躍していくか具体的なビジョンを持てる。
⑤「オペラ実習」　総合芸術であるオペラを1、2年生で養った基礎能力を基本に、実践的に研究する。
⑥「アンサンブル実習」　音楽史上、大変重要な分野である宗教歌曲を専門的に研究し、演奏技法を習得する。
⑦「合唱」　大編成から小編成まであらゆる分野の合唱曲を取り上げ演奏する。
⑧「イタリア歌曲研究」⑨「ドイツ歌曲研究」⑩「フランス歌曲研究」⑪「日本歌曲研究」　各国の言語の特色を理解把握し、表現する上での歌唱法を身につけ、幅広い感覚を持った声楽家になれるよう研究する。
⑫「室内オペラスタディ」日本語による室内オペラ作品を題材として、より演劇的な舞台表現を目指した演習を行う。
⑬「ピアノ実技」楽曲の研究に欠かせないピアノ技術を学ぶ。将来指導者として求められるスキルにも必須である。
⑭「シアターダンス」　舞台では歌唱力と共に身体的表現が重要な要素となる為、本講座ではバレエ、日本舞踊、ジャズダンス、ソシアルダンスを取り上げ、舞台で自由に表現する能力と体力、所作マナー等を習得する。
⑮「音声学」　声を出すための身体構造及び機能を学び、発声を科学的に研究する。
⑯「合唱指導法」　合唱指揮者としての知識と指導法を研究する。
⑰「音楽分析基礎講座」　楽曲を演奏する為には作品を分析する能力が必要であり、そのための大切な和声学への理解しやすい導入講座である。

※「オペラ実習」「アンサンブル実習」「合唱」は必ず履修するよう推薦する。

| コース | バレエコース | 代表 | 安達 悦子 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

身体で音楽を奏でるバレエは、言葉を使わずに感情を表現し、音楽・美術・踊りが融合した綜合芸術である。
プロフェッショナルなバレエダンサーになるためには、優れた芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどが求められる。本コースでは、クラシック・バレエの正確なポジション、質の高い動きやテクニックを身に付け、コンテンポラリーなどさまざまなスタイルの踊りにも対応できるように指導していくと共に、音楽大学ならではの多彩な授業により、表現者、芸術家としての教養を学生が主体的に身につけることを大切にしている。
学生は、プロのバレエ団と共に公演に参加することで本物に触れ、舞台での表現を学び、それぞれのレベルアップを目指す。また海外研修などで世界のバレエ教育に触れて視野を広め、将来幅広く世界で活躍できる舞踊家の育成を目標とする。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

1. 専門選択科目
① バレエ研究
② バレエ実習
③ 身体表現実習
④ ダンスパフォーマンス

2. 全コース共通選択科目
⑤ 音楽史
⑥ ロマン派、近現代の音楽史

3. 教養科目
⑦ 舞踊史
⑧ 解剖学
⑨ 動作学
⑩ 西洋文化史

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①② バレエは「目で見る音楽」とも言われる総合芸術であり、ダンサーの身体は楽器である。クラシック・バレエのクラスレッスンを行い、作品に触れることによって、芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどを向上させることを目標とする。
③ バレエ団の垣根を越えて、幅広くバレエの技術を習得する。またコンテンポラリーダンスや、キャラクターダンスについて学び、多彩な表現力を身につける。
④ ジャズダンスのあらゆるジャンル（ブロードウェイ、ジャイブ、リンディホップ、ブギなど）の基礎を深め、それぞれの個性にあった魅せ方と表現の可能性を模索し、身につける。
⑤ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、バレエを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。
⑥ バレエの名曲が数多く作曲された、ロマン派時代から、近現代までの音楽の歴史を、政治・社会・文化・思想との関わりを考慮しながら概観する。
⑦ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解する。
⑧⑨ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶ。また怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身につける。
⑩ ヨーロッパの芸術をより深く理解するために、ヨーロッパの気候・風土、政治的・社会的状況を学び、その精神文化について理解を深める。

| コース | 声優アニメソングコース | 代表 | 江原 陽子 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

声優アニメソングコースでは、日本国内にとどまらず海外からも熱い注目を集めているアニメを中心とした文化芸術において、「声優」「アニソン歌手」としてプロフェッショナルな世界で活躍する「声のスペシャリスト」を養成することを目標にしている。本コースでは、音楽大学が長年培ってきた「声」の魅力を高める多彩なカリキュラムを活かし、「演技」「歌唱」「ナレーション」に関する専門知識を深く学んだ上で、身につけた技術を数多くの本番で発表することによって、実践を通じて専門を磨きます。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

＜必修科目＞
「ヴォイスアーティスト技法研究」（1～4年次必修科目で30分の個別指導）
「ASアンサンブル実習」（1～4年次必修科目で学年別にイベント制作）
＜1年次基礎科目＞
「ASスタジオワーク」（1年次必修科目）
「ヴォイスアーティスト基礎演習」「ナレーション基礎演習」（1年次に履修）
＜ゼミ＞
「音声表現実習」（2～4年次に履修。2つのゼミのうち1つが必修科目となる）
「ヴォイスアーティスト演習」（2～4年次に音声表現実習と連続で3コマを履修）
＜演技＞
「演技論1」「演技論2」「演出論1」「演出論2」
＜歌唱＞
「アニメソング総合演習」（1～4年次に履修する学年別クラスの独唱の授業）
「ヴォイスアンサンブル」（1～4年次にASコースが全員履修する合唱の授業）
＜ダンス＞
「ASダンス演習」（1～4年次に履修する学年別クラスのダンスの授業）
「シアターダンス1－1」「シアターダンス1－2」（1年次に履修するバレエの授業）
「伝統芸能実習1」「伝統芸能実習2」（2年次に履修する日本舞踊・狂言の授業）
＜創作科目＞
「コンテンツ制作1」（1年次に履修。ボイスサンプルの作り方など基礎的な授業）
＜音楽基礎科目＞
「音楽理論入門」「音楽分析基礎講座」（1年次に履修。音楽の基礎を学ぶ）
「ソルフェージュⅠ」「ソルフェージュⅡ」（1年次に履修。音楽の基礎を学ぶ）

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

ASコースのカリキュラムは、「演技」「歌唱」「ナレーション」の三つの領域から成り立っている。三つの領域の中から、学生は自分の志向にあった領域を選び、「ヴォイスアーティスト技法研究」で、音楽大学ならではの個別指導の視点を取り入れた、綿密な「レッスン」を受けることができる。
1年次の「ASスタジオワーク」では、録音スタジオでの現場に対応するための、基本的なノウハウを身に着ける。また「ヴォイスアーティスト基礎演習」では発声発音の基礎、「ナレーション基礎演習」ではナレーションの基礎を学ぶ。
2年次から4年次にかけては、「音声表現実習」「ヴォイスアーティスト演習」という科目名の「ゼミ」を設定している。多様な学習分野の中から、学生ひとりひとりが自分の志向に合わせて、毎年二つの「ゼミ」を選択して履修する。この必修科目では、学年の垣根を越えた「縦割」のクラス編成を導入することによって、全コース的なコミュニケーションの促進が図られる。アニメソングのライヴや、朗読劇、ナレーション、アニメを題材としたミュージカルや舞台など、学生のニーズにあわせて、バラエティ豊かで斬新な内容の「ゼミ」を整備している。
学年別に「横割」でテーマを設定する「ASアンサンブル実習」では、多様な指向を持つ学生が、同期で一丸となって、演奏会や公演を制作する体験を共有する。
「演技」については、学年ごとに「演技論」「演出論」「舞台芸術概論」の講義があり、演技に関する歴史や理論をアカデミックな視点で学ぶ。「アニメソング総合演習」では、アニメの物語や役柄を、様々な角度から解釈しながら、歌唱能力を高めることを目指す。「ヴォイスアンサンブル」では、音楽のジャンルの枠に捕われず、コーラスを中心とする声のアンサンブルを学ぶことができる。さらにクリエーター指向を持つ学生のニーズに対応して、「コンテンツ制作」の授業も用意している。音楽の基礎を学ぶ講義も充実しており、「音楽理論入門」「音楽分析基礎講座」「ソルフェージュⅠ」「ソルフェージュⅡ」の四つの講義では、「初年次教育」強化の方向性を、ASコースの学生の特性にあわせて拡充し、普遍的な音楽の理論を学習する。アーティストとしてパフォーマンスする際に要求される「ダンス」も、重要な学習分野に位置づけている。「ASダンス演習」に加えて、他コースで開設しているバレエや日本舞踊、ジャズダンスなど、様々なジャンルのダンスを履修することができる。

| コース | ダンスコース | 代表 | 前田 建一郎 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ
**コースの到達目標**

ダンスは言語を超えたコミュニケーションであり、身体で音楽を表現する総合芸術である。本コースでは、様々なジャンルのダンスを学ぶことで、プロフェッショナルなダンサーに求められる技術と、個性豊かな表現力を身に付ける。自主公演においては、振付からパフォーマンスへとつなげるダンスの構成を体験するとともに、公演の企画制作を行う。多彩な実技と講義の授業を通して知識と教養を深め、数多くの本番を経験することで、世界で幅広く活躍できるダンサーを育成することを目標とする。

## Ⅱ
**コースが推薦する基礎科目名**

1. 必修科目
 ① 舞踊研究

2. 専門選択科目
 ② 舞踊創作研究
 ③ ダンスパフォーマンス
 ④ 身体表現実習
 ⑤ シアターダンス
 ⑥ バレエ実習
 ⑦ コンテンツ制作

3. 全コース共通選択科目
 ⑧ 音楽史

4. 教養科目
 ⑨ 舞踊史１／舞踊史２
 ⑩ 解剖学／動作学
 ⑪ 運動生理学
 ⑫ 栄養学

## Ⅲ
**Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について**

① 専門として選択したジャンルのダンスを追求し、学期末の公演に向けた練習を通じて、専門分野で必要とされるテクニックを深め、アーティストとしての表現力や音楽性を磨く。
② 自主企画公演に向けて、振付の創作過程を学ぶ。
③④ 様々なジャンルのダンスを幅広く学ぶ事で、多様なスキルを修得する。
⑤ タップダンス、フラメンコを学び、ダンサーとして豊かな表現力を身につける。
⑥ あらゆるダンスの基本となる、クラシックバレエの基礎を学ぶ。
⑦ パソコンで楽曲を編集するスキルを学び、自分のスタイルに合った音源を制作する。
⑧ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、ダンスを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。
⑨ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解する。
⑩ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶ。
⑪⑫怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身につける。

| コース | ワールドミュージックコース | 代表 | 大江 千佳子 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

本コースは各自の専攻楽器、音楽ジャンルが多岐にわたり、到達目標も専攻によって違いがありますが、コース全体の目標として次の3つがあります。

1.各自の専攻する楽器、音楽を探求し,演奏技術および表現力の向上を図り、伝統的なスタイルによる演奏が確実にできること。
2.新しい表現方法も探り、自身で演奏と簡単な作曲の両方が行えるようになること。
3.世界のさまざまな音楽文化を理解し、共演者と協調しあいながらアンサンブルができる。

本コースの特徴として、演奏家としての幅を広げるための録音やPA系の学習も可能です。 ホールなどの大きな会場では、自分の楽器と他の楽器の音量バランスをとるため、マイクなどで増幅する場合もあります。学習を通して、「生」の音との違いを知覚し、最善の音響を見出せるようになります。

豊かな感受性をもち、どのような場にもふさわしい音楽を提供できる音楽家になっていきましょう。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

①ワールドミュージック概論1～4
②ワールドミュージック演奏論1～4
③和声学Ⅰ～、ジャズハーモニーⅠ、Ⅱ
④DAW演習Ⅰ、Pro Tools入門
⑥音楽史
⑦音楽分析基礎講座
⑧楽器学、諸民族の音楽
⑨スタジオレコーディング演習、サウンドエンジニアリング基礎理論、録音技術研究、
⑩即興演奏講座

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①ワールドミュージック概論
いわゆる「クラシック音楽」とよばれる西洋音楽をはじめ、インド、ラテン、南米、アパラチアなどの音楽の旋法やリズムの基礎理論を知識と感覚の両方から習得していきます。それぞれの音楽のスタイルでの簡単な作曲、即興へのアプローチとなります。

②ワールドミュージック演奏論
概論と同様、様々な音楽の基礎理論を学習しながら、聴感覚やリズム感を訓練します。概論で取り上げた以外の音楽の演奏スタイル、アンサンブルについても学んでいきます。

③和声学Ⅰ～、ジャズハーモニーⅠ、Ⅱ
音楽を専門とするものにとって、必要不可欠な和音に関する学問。様々な和音の扱い方を習得することで、自身の作曲、編曲、即興の基本となっていきます。同時に、楽曲の演奏において作曲家の意図することへの理解の一助にもなります。

④DAW演習Ⅰ、Pro Tools入門
シンセサイザーの原理、オーディオの知識や音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びます。各自の演奏上の新しい表現方法の模索に活用できるようになります。

⑥音楽史
西洋音楽と日本音楽の歴史をたどりながら、各時代の音楽のスタイルを講義と生演奏により学んでいきます。西洋音楽、日本音楽の音の響きの移り変わりを理解することにより、他の音楽への理解も容易になります。また、演奏家が醸し出す雰囲気、その場限りの音の美しさを捉えることができ、演奏家としての姿勢も学べます。

⑦音楽分析基礎講座
西洋音楽の古典派、ロマン派を中心とした楽曲の和声分析の基礎を学びます。和声学でも述べたように、楽曲の演奏において作曲家の意図することへの理解の一助となります。

⑧楽器学、諸民族の音楽
世界の多様な楽器、音楽文化そして音楽と人間の関わりについて学びます。音楽のみならず、社会的な価値観の違いなども考えることになり、コースの到達目標の3に掲げた「豊かな感性をもち、どのような場にもふさわしい音楽を提供する音楽家」への第一歩となります。

⑨スタジオレコーディング演習、録音技術研究、サウンエンジニアリング基礎理論
録音系の授業ではマイキングやエフェクターの基礎知識を学び、自由なサウンドの構築方法を会得します。自らの楽器を通してセルフプロデュースができるようになります。PA系授業ではコースの到達目標の後半にあげたとおり、最善の音響を探り出し、演出することができるようになります。

⑩即興演奏講座
自由な即興演奏を学びます。自分のやりたい音楽を再確認するとともに、共演者との音楽的コミュニケーションをとる能力が向上します。

| コース | 音楽教育コース | 代表 | 佐藤 昌弘 |
|---|---|---|---|

## Ⅰ コースの到達目標

音楽教育コースは、音楽を愛好する人々を育む人材を養成するコースです。将来、学校の教員、吹奏楽や合唱のインストラクター、生涯学習や音楽教室の講師など、各分野の指導者として活躍できるようになるために、または、音楽の文化振興に寄与する職場で活躍できるために、4年間かけて研鑽を積みます。その研鑽の対象として、音楽教育コースのカリキュラムは、和声学やソルフェージュなどの「基礎能力」、作曲や編曲などの「創作表現」、声楽やピアノ、言語表現などの「実技と実習」、音楽教育演習、音楽教育研究やアートマネジメント研究などの「専門研究」、音楽史などの「専門教養」といった5つを柱としています。
　これら音楽の指導と実践、音楽の企画と運営に関する知識と能力を体得し、幅広い教養を醸成して、音楽を世に広めることに貢献できる力を着実に身に付けることがコースの到達目標です。

## Ⅱ コースが推薦する基礎科目名

1.専門選択科目
①音楽教育演習（2017年度以降の入学生は音楽教育研究）
②アートマネジメント研究（2017年度以降の入学生対象）
③ピアノ実習
④声楽実習
⑤言語表現演習
⑥作曲法・編曲法

2.全コース共通選択科目
⑦和声学Ⅰ～
⑧音楽史

## Ⅲ Ⅱの基礎科目の推薦理由とコースの達成目標との関連性について

①「音楽教育演習」（音楽教育研究）と②「アートマネジメント研究」の2科目は、コースの中核をなす授業です。音楽に関する基礎的な素養を身に付け、実践的な演習も加えていきながら、音楽の指導に関わる技能と知識、アートマネジメントに関する知識と実践を学び、専門的に研究していきます。カリキュラムの5つの柱においては「専門研究」の項目に類する科目です。
　音楽教育の分野で演奏の実践は不可欠です。特に指導の現場ではピアノを弾きながら歌い教えることを求められることがしばしばです。③「ピアノ実習」、④「声楽実習」では、個人レッスンを通じてピアノと声楽の基礎演奏力を養います。⑤「言語表現演習」では、「書く力」、「話す力」を徹底的にトレーニングし、プレゼンテーションとコミニュケーションのスキルを養います。 以上②～⑤は、カリキュラムの5つの柱において「実技と実習」の項目に類する科目です。
　⑥は、楽曲分析や諸形式による作曲・編曲を通して様々な音楽語法と音楽表現の理解を深め、あわせて合唱や合奏の編作のノウハウも学びます。カリキュラムの5つの柱においては、「創作表現」に類する科目です。
　⑦は、西洋音楽の伝統的な音楽書法を学ぶための必須の理論と実習です。カリキュラムの5つの柱においては「基礎能力」に類する科目です。
　⑧は、カリキュラムの5つの柱における「専門教養」の項目での根幹となる科目で、教職科目の1つでもあります。学校教育でとりあげられる、西洋と日本の音楽の源流から現代までの歴史を実演を目の当たりにしながら学ぶという、講義と生演奏が一体となった講座です。